

Hack For Japan

エンジニアだからこそできる復興への一歩

Hack
For
Japan

● Hack For Japan スタッフ
及川 卓也 OIKAWA Takuya
Twitter @takoratta
清水 俊之介 SHIMIZU Shunnosuke
Twitter @donuzium

第48回

Connect 2015 in Koriyama, with UDC

8月29日から2日間にわたって、福島県郡山市で「Connect 2015 in Koriyama, with UDC (アーバンデータチャレンジ)」が行われました。地域の課題をオープンデータを用いて解決するという目的のために、郡山市に集まった方々が泊まり込みで行ったハッカソンの模様を今回はお伝えします。

キックオフ

初日、参加者は郡山駅や郡山市役所などからバスを利用したり、また自家用車などで直接、会場の福島県郡山自然の家に集まりました。この会場は地元の方にとっては有名な施設だそうで、入浴施設、さらには食堂も完備されていて、まさにハッカソンのような開発合宿にはぴったりの会場でした。

まず、主催者などからの説明でイベントは開始されました。

今回のイベントの主催である、郡山地域ニューメディア・コミュニティ事業推進協議会からは、UDCの説明がされました。全国各地に拠点がある中、東北からは一関と会津若松に加えて郡山が選ばれたこと、「Connect」に込めた「笑顔でつないでいく」と「世界につないでいく」という想いが紹介されました。

郡山市政策開発部ソーシャルメディア推進課から郡山市のICTの取り組みが紹介された後、運営協力しているCode for KORIYAMAおよびエフスタ!!の代表の大久保仁さんから、郡山で活動しているITコミュニティ代表の立場からこのイベントへの期待が述べられました。大久保さんは、「まだまだ地方ではITの勉強会やハッカソンなども会社側からは遊びとして見られてしまうことが多いが、このイベントで理解が進むようになるようにしたい。2日間楽しんでほしい」と参加者に呼びかけました。また、地域課題を理解するため、郡山市政策開発部政策開発課から郡山市の課題と取り組みが紹介されました。郡山市在住の人であっても、結構自分の住んでいる自治体のことは知らないものなので、大変参考になったように見受けられました(写真1)。

アイデアソン

初日の午後はアイデアソンが行われました。ファシリテーターはNPO法人森とIT理事長の國枝裕介さんです。アイデアソンは次のようなステップで進められました。

●個人ワーク

2色の付箋紙に、1つは「誰に?」に対して、もう1つは「どんな」価値を届けるかを、3つ以上書き出す



●チーム内発表

チームを組み、付箋紙に書きだしたアイデアを1人ずつ発表。チームの他の人はそのアイデアをひたすら褒める



●アイデアの分析／まとめ

付箋紙に書きだしたアイデアを模造紙に貼り付け、

◆写真1 郡山市のイメージキャラクター がくとくんも参加



誰に何を提供したいかにおいてチーム内で傾向があったかを話し合う。その後、改めてアイデアを整理する



●ペアブレスト

ペアで輪になり、5分間ペアでブレインストーミングを行う。気づかされたことを1分間メモを取り、その後、1人移動し、別のペアとなり、同じことを繰り返す。これを5回行う



●アイデアスケッチ

ここまでで温められてきたアイデアを、キャッチコピーをタイトルとした形できれいにまとめる。テキストだけでなく、図や絵などを折り込み、アイデアをよりわかりやすくする



●上位案抽出

テーブルにアイデアスケッチを並べ、全員で回り、良いと思ったものに☆をつける

以上のアイデアソンの結果、ハッカソンでの開発の元ネタが固まっていきました(写真2)。

ハッカソン2日目

2日目は小雨の降る中、早朝のラジオ体操からスタート。筆者(清水)は初日からハッカソンに参加しました。

朝食を食べると、午後の成果発表に向けてハッカソン再開です。ハッカソンには珍しくチームを超えて助けあう参加者が多く見受けられたのは、日頃から熱心にコミュニティ活動をしている方々が多いからでしょうか。市民活動をする人をつなぎ、情報をオープンデータ化する「まちコミ!!」を作った「チームよし坊」を率いる大久保さんは、まさにそのコミュニティ活動の中心にいます。市民の声を可視化するための「にこにこイライラマップ(仮)」を制作した「チームFIC」を含めた2チームは、大久保さんの会社の後輩を中心に構成されていました。

◆写真2 アイデアソンの模様



雨のBBQ

スケジュールを見て楽しみにしていたBBQは雨で開催が危ぶまれたものの、屋根付きのスペースで無事決行されました。ただでさえ不慣れなうえに雨で湿気ってしまった薪に火をつけるのは、2日間で最難関のハックでしたが、それでも自分たちで火を起こして作ったご飯からはどこか懐かしい味が。途中煙がこもってしまい、屋根の縁の下に人が密集するイベントではありましたが、減多に味わえないハッカソン中のBBQを皆さん満喫していました(写真3)。

BBQ会場は同じ施設ではあるものの施設自体が広いので、ハッカソン会場から歩いて2分ほどのところにありました。雨で足元がぬかるむ中、近くにトイレがあるのかわからず、とりあえず会場を往復しましたが、「チームエフコム」の作った「トイレマップ」があれば一番近いトイレを探すことができました。 「CSHと愉快的仲間」が作った「エンジョイ! Now!」は、まさに大きな1つの会場

◆写真3 みんなで作るBBQは最高!



で利用するためのアプリで、iBeaconにより詳細な位置情報と連動した情報を提供するため、今回のような会場で大活躍しそうです。

午後からは最後の発表に向けてラストスパートです。どのチームも気合が入ってきます。「チームこじん」のアプリ「アキカツ」は、スペースを提供する側、使いたい側が利用するもので、空きスペースの予約が簡単にできるアプリを目指して、チーム内での議論が白熱していました。

結果発表



ポンポン

長い審査を終えて、まず3位に選ばれたのが「WiZ Graduate」の皆さんが作ったアプリ「ポンポン」。

ポンポンは地域防災力の向上を目的とした消防団員の活動を支援します。消防署に連絡が入ると、すぐさま消防団員のインストールしているアプリに通知が届き、火災現場の情報を示すマップが表示できるというものです。また火災現場の位置情報だけではなく、消火栓や防火水槽の位置も把握することができ、自分たちの良く知っているエリア外であっても、それら消火活動に必要な情報を支援するためのアプリを目指したいということでした。

ポンポンでは通知することに終わらず、各隊員間でもそのアプリ内でコミュニケーションがとれるようなアイデアが盛り込まれています。現在は通知された後の連絡はそれぞれの電話やメールで行われていることが多いようですが、通知から出動、現場での情報収集までカバーできます。すべてを完結できるこのようなアプリはいろいろな分野でも必要なものだと思います。



オストメイトトイレ

2位に選ばれたのは、会津大生とWiZの学生で構

成されたチームの「SHED(データ部門)」の「オストメイトマップ」。ちなみにSHEDというのはアプリ開発合宿で一緒になったメンバーで作ったサークルの名前だそうで、今回は2つのチームに分かれて参加していました^{注1}。

SHED(データ部門)のメンバーは、全国におおよそ10万人いるとされる人工肛門や人工膀胱保有者の方々(オストメイト)を支援するため、それらの情報を整理しLinkDataで公開し、サイトの機能を使ってマップ上に公開しました。LinkDataではExcelのようなデータ形式をRDF^{注2}に変換してくれるため、よりWebやアプリ開発にフレンドリーなデータ形式となっています。

現在郡山市ではオストメイトトイレの情報をPDFファイルで公開している^{注3}ため、このようなオープンデータを整備していくことも、シビックテックを支えるためには大切なことだと思います。



MAP + DEPLOY = MAPLOY

ここまで読んで気づかれた方も多いと思いますが、発表されたものの多くが、位置情報や地図を扱うものです。オープンデータを利用したアプリの中に、地図にデータをマッピングする機能が入ったものが多いのは今回に限った話ではなく、筆者(清水)が参加したハッカソンでも同じような機能を実装することが繰り返しありました。

浅井涉さんと結成したチーム「BAKAVIRUS_A」で制作した「MAPLOY」は、地図を利用したアプリの開発やオープンデータの公開を支援するため、Excelファイルをドラッグ&ドロップするだけで、データを地図上に可視化できるWebサービスです。さらにはAPIとしてもデータを提供することができます。運良く最優秀賞に選んでいただきました。

ワンアクションで、地図上に吹き出しの出るマーカーや「データの重み」を表現する円を配置することができます。住所だけのデータでも自動で緯度経度

注1 惜しくも受賞はなりませんでした。もう一方のSHED(アプリ部門)チームは「About Route Guide」という、キャラクターとの対話形式で希望の場所とそこまでのルートを提案してくれるアプリを発表しました。

注2 Resource Description Framework

注3 https://www.city.koriyama.fukushima.jp/212000/fukushi/documents/2381_osutomeito2207.pdf

をつける機能があるため、難しいことをあまり意識せずに、オープンデータを利用してシビックテックに参加できるようになればという想いもあります。

来年に向けて

来年開催されるUDC 2015本番に向けての、

キックオフイベントでもあった今回の「Connect 2015 in Koriyama, with UDC」。年末に再度開催される審査会のために、アイデアをブラッシュアップしたり、開発を進めたりと今後も続いていきます。皆さん、また郡山でお会いしましょう！ **SD**

Column 情報支援レスキュー隊の一般社団法人化

この連載でも何回かお知らせしている、災害発生時に被災地から正しい情報を迅速に発信することで災害復旧・復興支援を行う情報支援レスキュー隊^{※1}（英語名IT DART）が一般社団法人となりました。このコラムでは、8月8日に行われた創立総会の模様と現在の活動状況、今後の予定をお伝えします。

8月8日にスマートニュース社のイベントスペース（東京都渋谷区）で行われた創立総会では、まず一般社団法人としての創立総会・理事会が開催され、初年度の活動体制と計画が承認されました。体制としては、正会員（個人）および賛助会員（法人）からなる会員総会により会の運営方針が決定され、それを代表する立場として理事会および運営委員会が組織されるという体制となっています。一方、実際の活動の主体は隊員となり、これは会員総会とは別に組織されます（図A）。

正会員の年会費は1万円であり、賛助会員は同じく年会費10万円となっています。一方、隊員からは会費は徴収しません。正会員や賛助会員もそうですが、とくに隊員は発災時に被災地にすばやく赴くことを考えているので、全国各地から募集したいと考えています。すでに、正会員、賛助会員、隊員の募集と寄附の受け付けを開始しています^{※2}。

8月8日の創立総会では、設立にあたっての挨拶を陸前高田市、多賀城市、茨城県の来賓3名の方からいただきました。また、50名弱の参加者とともに、初年度の活動内容をテーマに記念ワークショップが開催されました。

現在はまだ団体としての体制を固めている最中です。たとえば、隊員募集は開始しているものの、本原稿執筆段階では隊員規則もまだ作成中です^{※3}。隊員の要件やトレーニング内容などを検討し、それを隊員規則に反映させる予定です。また、運営委員会の中にワーキンググループ（WG）を設立し、会の活動や平時の準備を進めています。現在立ち上がったWGは、情報システムWG、提携・協定

促進WG、隊員活動WG、情報分析・発信WGとなります。たとえば、情報システムWGでは、会員や隊員間、さらには提携団体との間のコミュニケーションや情報共有手段の整備を進めています。また、発災時に用いる地理情報システム（GIS）や簡易Webサイト作成サービス^{※4}の調査なども行っています。

このように、本格的な活動に向けての準備を進めると同時に、災害時の活動も開始しています。9月に北関東から東北にかけての豪雨で茨城県常総市など多くの地域が甚大な被害を被りました。この災害に対して、IT DARTも2回の被災地入りをするなど、「情報支援」の立場で活動を行っています^{※5}。

まだ団体としての活動は開始されたばかりですが、技術の力での支援をぜひとも本格化させていきたいと考えています。ご興味のある方は会員や隊員としての参加をご検討ください。

注1 <http://www.itdart.org/>

注2 <http://itdart.org/wanted/>

注3 そのため、隊員募集は暫定的なものとなっております。

注4 JimdoやWix、Weebly、Strikinglyなど。

注5 <http://itdart.org/content/2015911-heavyrain/>

◆ 図A IT DART体制図

